

雑 報

553.41 : 550.8(521.52) : 622.19

長野県甲武信鉱山金銀鉱床調査報告

別子鉱業株式会社の依頼により甲武信鉱山鉱床周辺の概査を行った。鉱区は長野県南佐久郡川上村梓山地内にあり、小海線信濃川上駅東方約12 km に位しバスを通ずる。この地域は千曲川の源流に当り海拔1,300 m の高所で、なお海拔2,000 m 内外の山岳が重疊して地形概して急峻である。調査地域は甲武信岳から発して北流する梓川を中心として東西にまたがる約30 km² で、地域北半はいわゆる秩父古生層に属する砂岩・チャート・および石灰質頁岩を主とする古生層、南半はこれを貫いて噴出した黒雲母花崗岩より成っている。古生層は小断層および褶曲多く、構造は極めて複雑であるが、極く一般的に見て梓川東岸地区は走向NW~SE、傾斜NE、西岸地区は走向NE~SW、傾斜NWと言える。傾斜は比較的急で40°~70°を示す。この古生層中にはやや顕著な石灰岩レンズを数枚存在し、そのうちには厚さ100 m に達するものがある。石灰岩質頁岩は梓川西岸の進入花崗

岩体に接する地域のみに分布し、この中に鉱床群が胚胎している。以上の如き地質構造および岩相の分布から考えて、花崗岩進入前に形成された梓川の川筋に沿う断層線の存在が推定される。鉱床はすべて接触鉱床で、約1 km の地域にわたり南より國師、山神、および梓山の3鉱床群に分たれる。そのうち前2者は柘榴石および灰鉄輝石スカソンの伴う金銀鉱床で、これらは古生層を貫いて噴出した多数の石英斑岩岩脈の上盤または下盤に來ている。後者は糖晶質石灰岩の上盤に胚胎する磁鉄鉱鉱床で、上部に磁硫鉄鉱の露頭を有する。この鉱床地帯は往昔武田信玄時代に金山として盛に採行された所で、多数の旧坑が見られるが、現在ほとんど崩壊して鉱床賦存状況を明らかにし得ない。昭和25年6月より別子鉱業株式会社によつてふたたび開発を企てられ、目下國師、および山神鉱床群の一部を採鉱中である。(梅本悟・時津孝人)

553.43/.44 : 550.8(521.24) : 622.19

群馬県大峯鉱山調査報告

鉱山所在地は群馬県利根郡水上町大字川上で水上駅の西南直距4.5 km、谷川岳の南方直距9 km にあたる。水上駅より事務所迄約4.5 km は自動車を通じうる。

西部の鉱床は吾妻耶山麓を占めいづれも阿能川上流の支流より開坑している。

東部の鉱床は寺間沢の上流でいわゆる黒鉛地形とも云うべき丘陵性の所にある。

本鉱山は明治24年以来幾度か採行され、特に明治33年より現地にて銅製錬をなし、最盛期には従業員は1000名にも及んだ。戦時中も阿能川鉱山として採行されたが昭和18年休止、昭和25年別子鉱業株式会社これを買収し現在採鉱準備中。

地質は第三系新統中、上部の凝灰岩類酸性乃至中性の熔岩流およびこれらの中に挟在する2層の頁岩および砂岩よりなる。下部より(1)下部火山岩類(斜長石英岩・安山岩・凝灰岩等)(2)下部頁岩(3)中部火山岩類(斜長石英粗面岩・角礫灰岩等)(4)上部頁岩(含海綠石・植物化石)(5)上部火山岩類(斜長粗面岩・緑色凝灰岩・黒雲母石英粗面岩等)が分布して居り、これらは走向

N70°W、傾斜20°~30°SW 東南部を褶曲し整合に北東から南西に堆積している。鉱床後の南北性水平断層により東部は南に数十m づつ移動している。

鉱床は前述(4)の上部頁岩類の最下部の含凝灰岩粒頁岩およびその上位の凝灰岩中に胚胎したいわゆる黒物式塊状雜鉄で長径1~3 m の塊が厚さ5~10 m の地層中に点在する。鉱石はこの層位のみに知られ他には硫化鉄の鉱染程度しかない。

主鉱床は金山坑、栄盛坑、千戈坑に到る約1.5 km の間と東南部の不動坑、寺間坑が知られている。

鉱石は閃亜鉛鉱・方鉛鉱・黄銅鉱よりなり脈石には多量の重晶石と少量の石英・方解石を伴う。

鉱石の平均見込品位は銅2%、鉛2~5%亜鉛15~20%である。

前述の如く鉱床は上部頁岩の最下部の含凝灰岩粒頁岩中に存在するから同層と追跡して行くこと。次に構造的には南北系の小断層で鉱床が移動している故、既知鉱床の中間部の外、西北部に存在する可能性がある。(林昇一郎・高瀬博)